（城西人文研究第28巻）

〔研究ノート〕

嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解（十）

黄色瑞華

凡例

一　本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』（所収句八二二、他に俳諧歌一八）の全注解である。

一　一行めに『一茶発句集』の所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に（　）に入れて注した。

一　二行め以下に㊢として、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。

一　句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。

一　語注は簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。

一　各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も最小限とした。

一　注釈史上看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者名及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峯『名句評釈』」のように略記した。詳しくは稿末の「参考文献」を参照されたい。

俳諧一茶発句集　下

秋の部（承前）

若僧の扇面に

影法師に恥よ夜寒のむだ歩行

㊀　おらが春・斗囿あて書簡（文政3・3・14付）・文政版発句集

▽　おらが春、座五「むだ歩き」。八番日記（文政2・12）、前書「若僧に対して」。中七以下「恥よ夜永のむだ歩き」。同（4・9）、前書なし。中七以下「恥よ夜永のむだ歩き」。

注　おらが春、第四話「影法ハさながら西行らしく見へて殊勝なるに、心ハ雪と墨染の袖と思へば〳〵」。その上白に「似雲法師　西行に姿ばかりハ似たれども心ハ雪とすミ染の袖」。

解　月の夜、丸い頭の影法師に恥じよ。市中のにぎわいの中を歩きまわるその心根のあさましさを、の意。

▼　川島『新釈』に、「この若法師、少しく品行方正でなかつたと見える。脳天に一つチクリと針を刺したやうな句である。然し軽い諧謔調が、互ひに心地よく書き心地よく受けて苦笑したらうと思はれるやうな、作者と若法師との親しさを思はせる。多分入魂な僧侶に戯れに書いてやつたものであらう」。勝峯『名句評釈』に、「いづれこの若法師が夜遊びでも少し過ぎたであらうが、かうづけ〳〵言はれては堪らなかつたらう」「『影法師』で相手の僧なることゝ、夜道を歩く具体相を現したことゝがこの句の技巧である」。勝峯『評釈』に、「青道心の或るものから扇に一句望まれて、若気の誘惑に負けて、邪婬戒を犯さぬやうに書いてやつた句である。秋のもの憂さから煩悩の奴となつて、犬のやうに迷つて垣間見なんぞしたつて、その坊主では誰れも見向きもしまい。歩き損、くたびれ儲けに決つてゐる。お前の影法師を見るがいゝ。坊主天窓がそつくり写つてゐるではないか。仏の道に入つて剃つたその天窓の手前も耻しくはないか。たゞさへ寒いこの頃の夜空に、その天窓をさらしての無駄あるきはやめたがよい。魔がさしたらこの扇の句を見て慎しむがよい」。川島『新解』に、「この若僧、とかく評判のあった人物らしい。丸い頭のかげ法師に恥じよ。すなわち仏門にある身を反省せよの意で、ここまでは常套であるが、

『夜寒のむだ歩き』が利いている。身も心もひきしまる今日この頃の季節に、うそうそと歩きまわつていてよいのか、という裏には、修行盛りの身であることのさとしも含んでいる。あらわな譴責でなく、しかも急所をついている」。

旅

一人と帳面につく夜寒かな

㊢　文政版発句集・希杖本句集

▽　七番日記（文化15・6）、中七以下「書留らるゝ夜寒哉」。同（15・7）、中七以下「帳に付たる夜寒哉」。

解　宿帳の当日の条に、「一人」と記され、「みなし子」「巣なし鳥」と自称したころのことがよみがえったのであろう。往年の回想吟。

▼　勝峯『名句評釈』に、「昔の旅館では一人旅の宿泊は警戒されたものである。宿帳へ一々人数をやかましく書いたものであろう。『おれ様は』『一人だ』番頭はやゝうさん臭さうな面持で帳面につける。さうした瞬間の気持がこの句の味ひどころである。独旅は最初からきまつてゐることだが、かうして『一人』と帳面につけられる時、今更の如く感じるわびしさである」。頴原『名作集』に、「田舎の侘しい宿である。外に泊り客もないと見えて、夜寒の灯の下に書きつけられた宿帳には、自分の名が一人あるだけだ。たつた一人きりだと思ふと、秋の夜の淋しさが急に身にしみるのである。因にいふ宿帳に自ら『一人』と書きつけるさまとして解した説もあるが、すでに別案に『一人と書留めらるゝ』とあるのだから、それは泊り客合計一人と、宿の方で書きつけたのである。同行表もなく自分一人だけといふのではない。宿の泊り客が自分一人だけなのである」。前田『俳風』に、「晩秋の頃、木賃宿に入り宿帳に一人と記帳されて、夜の寒さがひとしお身にしみることだよ」「同書（注、七番日記）に並記の『次の間の灯で飯をくふ夜寒哉』とともに往年の回想吟である。木賃宿で一人と記帳され、寒さにふるえながら

次の間の灯を頼りに遅い食膳に向うとあっては、貧寒の一人旅のわびしさも極まろうというもの」。

膝がしら木曽の夜寒に古びけり

㊐　嘉永版発句集初出・発句鈔追加

▽　発句鈔追加、上五「膝頭」。七番日記（文化12・8）、上五・中七「膝頭山の夜寒に」。

解　すっかり肉が落ちて、大きくさえ見える膝がしら。山間の宿に一人旅寝して、しみじみと自身の膝がしらを見つめているのである。

▼　宮坂『一茶』に、「秋も深まり夜冷えのはげしい木曽にあって、膝小僧のあたりが弱ってきたようだとの意。木曽旅泊の回想か。膝がしらが『古び』るとは万鈞の重みがある表現。

行灯を畑に置て碪かな

㊐　梅塵本八番日記（文政2）

▽　中七「畑に居(ゑ)へて」の誤りか。中七以下「畑に居(ゑ)へて砧かな」。

注　「碪」、きぬで打って、布をやわらげ、つやを出すのに用いる石の台。砧。ここでは藁砧を言ったのであろう。

解　刈り取りが済んだ、その直後から藁仕事のために（藁）砧を打つ篤農。

草藪も君が代を吹小夜ぎぬた

㊐　稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽　発句題叢、座五「小夜砧」。

解　草深い辺地にも平和の風が及び、砧を打つ音さえ、ゆったりとした感じで聞こえてくる、の意。

雨の夜やつい(ひ)隣りなる小夜碪

㊐　八番日記（文政2・8）

▽　中七以下「つい(ひ)隣なる小夜ぎぬた」。

解　雨音の間をぬうように遠くから聞こえる砧を打つ音は、実はすぐ近くの家のもの、の意。

梟が拍子とるなり小夜ぎぬた

㊐　八番日記（文政2・9）

▽　中七「拍子とる也」。

解　「ノリツケホセ、ノリツケホセ」の梟の鳴き声に合わせるように、「トン、トン」と砧を打つ音が耳に入ってくる、の意。

飯けむり賑ひにけり夕ぎぬた

㊐　嘉永版発句集初出

解　砧を打つ音に調子を合わせるように、あちこちで夕餉の炊事の煙が立っている、の意。

豊　秋

二軒家や二軒餅つく秋の雨

㊐　梅塵本八番日記（文政3）・文政版発句集

▽　風間本八番日記（文政3・9）、上五「二軒やは」。

解　二軒並んだ家。その双方から餅をつくきねの音が、雨音をぬって聞こえてくる。豊作だったからなあ、の意。「二軒家」を異母弟と折半した両家か、の詮索は無用。

▼　勝峯『名句評釈』に、「秋雨の蕭々たる野中の二軒家をやゝ隔つて見た時は、さびしさといふ感じを持つた筈だ。やがて段々近づくにつれて何やら音が聞え出した。おやと思ひつゝ更に近づくと、それは心地よい餅つきの音だつた。しかも二軒揃つてゞある。秋雨の中の蕭條たる点景は一転して陽気な家の中の動作に変つたのである。かうした陽気の原因は何か、それに前書の「豊秋」である。手に鍬を取らない一茶も周囲の人達の仕合になることは嬉しいことである。もう一度繰返す。『二軒家や』と読みきつて享ける感銘は淋しさである。そして『二軒餅つく』でそれが変じて賑かになる。一茶の心の動きと、この二句の連続とがぴッたりと一つのものとなつてゐる。そしてこの重語的の修辞が又ぴッたりとそれに合致してゐる。初五も中七も、そしてその連続の妙諦に於てこの句は心にくきまですばらしくも成功してゐる」。暉峻『名句の鑑賞』に、「やや距離をおいて眺めると、淋しい野中の二軒家、しかも秋雨が

蕭々と降りそそいでゐる。が、近づいてよく見ると、二軒共軒下に人影がうごめき、やがて景気のよい餅つきの音が聞えて来る。二軒の中の一軒だけが餅をついてゐたのでは却つて片輪な感じです。二軒が二軒ともついてゐるのでなければ豊かな感じでありません。『二軒家や』と、秋雨の中のうらぶれた風景を印象づけておいて、『二軒餅つく』と賑かな豊かな情景に急転して行く手腕は、老巧なものであります。そしてその賑かさ豊かさが、『二軒家』といひ『秋の雨』といふ風景によつて、どことなく貧しさのつき纏うた、いぢらしいものに受取れるところに、この句の味はひの細かさがあるのです」。荻原『春秋』に、「二軒家といふのは、街道筋などに、たつた二軒きりポツリとある家のことで、昔から二軒、今も二軒、それで二軒家と呼ばれてゐるもの。一軒の家でも、ペツタリコ……。二軒そろつて餅をついてゐる。これを『秋の雨』に於て感じたのがいい。かういふ感じは空想ではなかなか出来ない。恰度そこを通りがかつての実感の作に違ひあるまい」。

外ヶ浜

今日からは日本の雁ぞ楽に寝よ

㊀　七番日記（文化9・8）・株番・稿本発句題叢・あとまつり・文政版発句集

▽　七番日記・発句題叢、前書ナシ。七番日記以下（文政版発句集も）、上五「けふからは」。希杖本句集、「これからは」。

注　「外ヶ浜」、津軽沿海。当時、日本の最北端。

解　雁どもよ、ここは泰平の日本国。ここまで来たからには、今日からは安心してゆっくり眠れよ、の意。

▼　勝峯『名句評釈』に、「お国自慢の句としてこれも有名な一句である。そして一茶の側の動物愛の一表出としても嬉しい一句である」。中島『一茶集』に、「秋になると、シベリアから日本を目ざして渡って来る雁の群は、まず外ヶ浜へたどりついて、羽を休める。その雁の群に向って、さあ今日からはお前たちも日本の雁になったのだ、安心して休むがよい、

という呼びかけなのである。一茶は世界中で日本が一番住みよいところだと、心から思っていたようである」。宮本『大観』に、「雁は秋になると、北方のシベリア地方から津軽海峡を越えて、日本へ渡来してくる。そこで外ヶ浜までたどりつけばもう日本の領土だ、今日からは日本の雁になったのだ。安心して寝るがいいと雁に呼びかけた句である。一茶には『桜咲く大日本ぞ日本ぞ』（七番日記）のような句もあって、天下泰平の徳川幕府の世をたたえており、この句には小動物によせる一茶らしい愛情が表われている」。

初雁の三羽も竿となりにけり

㊐　八番日記（文政2・8）

▽　座五「也にけり」。

解　たった三羽の初雁だが、雁は雁、竿になったり鉤になったりして行くよ、の意。

小組を呼おろしけり小田の雁

㊐　八番日記（文政2・8）

▽　上五「大組を」の誤り。八番日記、上五「大組を」。文政句帳（5・8）、上五・中七「大組の空見おくるや」。

解　雁の大群が、田に降りている何羽かの雁に呼び寄せられるように、一斉に田の面に降りたのである。

初雁やあてにして来る庵の畠

㊐　七番日記（文化8・7）・我春集

▽　七番日記・我春集とも上五「はつ雁や」。

解　まだ、日本の土になれていない雁であろう。これといった物もないわが庭畠に、餌を求めて降り立ったことだ、の意。

初雁や芒はまねく人は追ふ

㊐　七番日記（文化8・7）・我春集・希杖本句集

▽　七番日記、上五「はつ數（雁）や」。

解　すすきの穂に招かれたように、降り立った雁の群を、作物を荒らされてはと、人は追う、の意。

旅にありて

雁啼やあはれ今年も片見月

㊐　文政版発句集

解　にぎやかな声をたてて雁が渡って行く。ああ、私は今年もまた一人きりの月見をすることだ、の意。柏原帰住前の回想吟である。

考　『白氏文集』、「八月十五夜、禁中独直対〻月憶三元久一」の詩句に「三五夜中新月〻色、二千里外故人〻心」に思い合わせたか。八番日記（文政2・9）、「古郷の留主居も一人月見哉」。

初雁もとまるや恋の軽井沢

㊐　八番日記（文政2・9）

▽　上五・中七「はつ雁も泊るや」。

解　数多の恋物語を残す軽井沢。この初雁たちもここで一夜をすごすのか、の意。

白川や曲り直して天津雁

㊐　七番日記（文化11・8）・文政版発句集

解　さすが京の白川、雁の群も隊列を組み替え、内裏の上を避けて行くよ、の意。

▼　丸山一彦『七番日記』（講談社）に、「白川は京都の北郊。『曲直して』は、北地から渡来する雁が内裏を避けて通るさま」。

信濃雪ふり

田の雁や里の人数はけふも減る

㊐　七番日記（文化8・7）・文政版発句集

▽　七番日記、座五「けふもへる」。稿本発句題叢、中七以下「村の人数ハけふもへる」。我春集、「雁鳴や村の人数はけふもへる」。希杖本句集、上五・中七「初雁や里の人数は」。

解　雁が渡来し、初雪に見舞われる季節。野外で農作業をする人の数は日に日に少なくなっていく、の意。

▼　川島『新釈』に、「寒くなつて、刈跡の田に雁の下りる頃になると、もうそろ〳〵雪を見るやうになる。何れの雪国でも、冬の間男達が稼ぎに出ることは生活上止むない習慣であるが、これもそのことを云つたものであらう。田に集ふ雁と反比例に、日に〳〵人口の減つて行く淋しさを唄つたものである。特に具象化された叙法を執つてないが、そのために反つて、取残されたこれから長い冬を籠らうとする人の頼りない気持や、三人五人と旅仕度して別れて行く人の姿なぞも連想の中に活かされて来る」。

おちつくと直に鳴けり小田の雁

㊐　文化句帳（文化3・8）・文政版発句集

▽　座五「小田〔の〕雁」。

解　田の面に降り立ったとたんに、うるさく声を立てている、この雁どもは、の意。

天津雁おれが松にはおりぬなり

㊐　文政版発句集

▽　座五「おりぬ也」。

解　空を行く雁、私の気に入りの松には降りようともしない、の意。

朝夕や峯の小雀門馴る

㊐　文化句帳（文化3・8）・稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽　文化句帳以下、座五「門なるゝ」。

解　秋も暮、雀の群が次第に人里に集ってきた。このごろは、人の姿を見ても飛び去ろうとはしない。すっかり、人里に馴れてしまったのである。

立鴫のいまにはじめぬ夕かな

㊐　享和二年句日記（夏〜秋）・文政版発句集

▽　座五「ゆふべかな」「ゆふべ哉」「けぶり哉」。

解　暮れ方を待って、次なる地へ飛び立つのだろう鴫だが、まだその気配がない、の意。

普陀らくや蛇も御法の窩に入

㊐　八番日記（文政4・9）・文政版発句集

▽　上五「ふだらくや」。八番日記、上五・中七「ふだらく」。座五「穴に入」。

注　「補陀落」「普陀らく」「普陀落」。梵語Potalaka、光明山・海鳥山・小花樹山とも訳される。観世音菩薩のいます所という。ここでは寺院の境内、の意。

解　寺の境内、蛇も冬季間の救済を願って地中の穴に入ることだ、の意。

蛇も入穴はもつぞよ鈍太郎

㊐　八番日記（文政3・9）・文政版発句集

▽　中七「穴はもつ也」の誤りであろう。八番日記、中七「穴はもつ也」。

注　「鈍太郎」、才知のにぶい男をいう。

解　鈍太郎よ、蛇でさえ冬季に籠る穴を確保しているんだぞ、の意。

足枕手枕鹿のむつまじや

㊐　七番日記（文化11・8）・稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

解　日向に休む鹿の雌雄・親子。

山寺や椽(縁)の上なる鹿の声

㊐　八番日記（文政2・9）・おらが春

▽　八番日記、中七以下「縁(椽)の上つるし(な)〔か〕の声」。梅塵本八番日記、「縁(椽)の上なるしかの声」。

解　人影もない山中の小寺院、本堂の外縁の上に一頭の鹿、その鳴き声が静寂を破る。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「怯惰な性格の鹿は警戒心が強くて、容易に人の棲むところへは姿を見せない。その鹿ですら山寺には恐れも怖びえもせずにやつて来て、ぬれ縁（椽）の上にひよんと跳ね上つて、こゝにゐるぞと知らせるやうに啼く。牝を慕つて呼んで見たのであらう。八番日記の『高椽を覗いてよぶや男鹿』より遙かに大膽な牡鹿であり振舞ひである」。川島『おらが春新解』に、「これは無住寺であろうか。もっとも、その時期になると、人なじまない猫なども人を恐れずなるので、この鹿も牝を

追って迷いこんで来たのかも知れぬが、一向に感動のない句である」。

しき嶋や深山の鹿も色好む

㊐　文政版発句集

▽　八番日記（文政4・9）、上五「日の本や」。同（4・9）、上五・中七「しほらしやおく山鹿も」。だん袋、上五・中七「しほらしや深山の鹿も」。

注　全集本、文政版発句集・嘉永版発句集とも上五「しぎ鳴や」と校訂。八番日記（4・9）に「日の本や」とあるから、日の本と同義で「しき嶋（敷）」を用いたと見る。

解　泰平の日本国、深山の牡鹿も何におびえることもなく牝鹿を呼んでいるよ、の意。

鹿鳴や今二三町遠からば

㊐　八番日記（文政2・9）

注　上五「鳴鹿や」の誤りか。八番日記、上五「鳴鹿や」。

解　鹿が牝鹿を求めて鳴いている。もう二三丁も離れていたら、この声は耳に入らなかっただろうに、の意。

やさしさや鹿も恋路を迷ふ山

㊐　文政版発句集

▽　中七「鹿も恋路に」。文政句帳（文政6・9）、「おく山の鹿も恋路に迷ふ哉」。

解　優雅なことよ、鹿さえ恋路に迷ふとは、の意。

人ありと見せる草履や田番小屋

㊐　文政句帳（文政5・8）・文政版発句集

▽　上五「人居ると」の誤りか。文政句帳、上五「人居ると」。

注　「田番小屋」、田の水番小屋。

解　水番小屋の外に草履がぬいである。中に人がいるぞと言わんばかりに、の意。

米穀下直（値）にて下々なんぎなるべしとは、こと国の人

うらやましからん

日本の外ヶ浜まで落穂哉

㊐　七番日記（文化15・12）・文政版発句集

▽　七番日記、前文なし。

解　豊作、国中が豊作で、陸奥の沿岸まで稲穂がこぼれるほどだ、の意。

▼　川島『新釈』に、「『どうだい、こんなもんだい。』と、可憐な愛国主義者が大陸に向つて大見得を切つて居る。この時代の人達の日本国といふ観念を考へると面白くなつて来る」「要するに日本を中心として世界といふものを考へて居たので、それだけでも太平楽を並べて居られた訳である」。勝峯『評釈』に、「『米下直にて下々なんぎ』とは豊作の為に、経済機構は昔も今も同じく、米を売る百姓は下直で却つて難儀するであらうが、豊作そのことはめでたしと見たのである。そして日本はこれ程豊作だが、異国にはこんな事はあるまい。日本なる哉〳〵と例の無邪気なお国自慢である」。

旅人の垣根にはさむおち穂哉

㊐　文政版発句集

▽　文政句帳（文政5・8）、中七以下「藪にはさみし稲穂哉」。だん袋、「旅人が藪ニはさミし稲穂哉」。

解　旅人が道端に落ちていた稲穂を拾って、人家の垣根にそっとはさんで通り過ぎて行ったのである。

▼　川島『新釈』に、「旅人が道の端に落ちて居た稲穂を拾つて、傍らの垣根に一寸挟んで行つたといふ小さな動作の中に、質朴な人情がよく写されて居る。と同時に、豊葦原の瑞穂の国に生れた人の稲穂に対する特殊の親しみ、寧ろ、むげに踏付けることの出来ない尊敬に似た優しさがよく語られて居る」。

今年米親といふ字を拝みけり

㊐　八番日記（文政2・9）

▽　中七「親と云字を」。

注　「今年米」、今年収穫した米。新米。

解　小作人が届けてきた新米であろう。田地を残して

くれた親があったればこそと、感謝の気持を詠んだのである。

ことし米我等が小菜も青みけり

㊐　稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解　新米を口にする時季、庭先の越冬用の漬物にする小菜も少しずつ青みを増してきた、の意。

姨捨はあれに候とかゝし哉

㊐　七番日記（文化15・8）・碩斎あて書簡（文化15・9・9）・稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽　書簡・希杖本句集、座五「かゝしかな」。文政句帳（文政6・7）、座五「夕かゝし」。

解　あれが姨捨山に候、と言わんばかりに立つ案山子である。

▼　川島『新釈』に、「妻女山から筑摩川にかけての、あの辺一帯の見晴しは、信州と云つても非常に明るい感じのするところである。その明るい感じと、この句の持つ呑気な気分とはピツタリ合つて居ると思ふ。然し、姨捨山の本家争ひが昔から続いて居たとすれば、この句は或はもつと卑近な意味を持つて居るのかも知れない。若し左様だとすると、この案山子はポスター染みて嫌になる」。勝峯『評釈』に、「これは単純な滑稽であらう。ぽかんと立つてゐる案山子が、旅人に姨捨はあちらで候と案内する様に興じ見たゞけのものである。『候』がよくきいてゐる」。荻原『春秋』に、「此句は、姨捨は何処であるかと、尋ねながら行く旅の人に、『姨捨はあそこでござります』と指をさすやうにして、案山子が立つてゐるといふ意。かかしの竹の突張つた手付きが、指さして教へる形と見られる。又、案山子を立てる頃の黄熟しきつた稲田――あの辺は、田毎の月とも云はれる通り、田の多いところだ――を前景として姨捨の高台が向うに見える更科一帯の風景としても面白い」。

乳呑子の風余(除)にたつかゝし哉

出　八番日記（文政2・7）・おらが春・斗囿あて書簡（文政3・9・14）

▽　八番日記、中七「風よけに立」。おらが春・書簡、前書「二番休」。中七「風よけに立」。文政句帳（文政8・9）、上五・中七「つぐらの子風除に立」。

解　稲刈りであろう。野良に連れ出した乳のみ子は、つぐら（藁で編んだ器。ここでは乳幼児のための育児具）の中にあってくったくない。この子の母は、ちょうど案山子が秋の夕風を防ぐあたりに、つぐらの子を置いたのである。おらが春・書簡の前書、「二番休」は終業前の小休息。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「家をから（空）にして野良ではたらく家族的団欒を案山子の周辺に展開させ、母の乳を慕ふ子をせめて荒い野良の風にあてさせないこゝろ遣ひである。その案山子のかげで、昼休みのひと時を飽きるまで乳を吸はせる情景を案じて、風除けの効果を大写した句である。此の風除けから発想して、八番日記の『母親を霜よけにして寝た子哉』の橋上乞食を題とする、人情満点の描写へと進んだのである」。川島『おらが春新解』に、「早朝から働く耕作者は昼食も早いので、これは昼休みの次の午後の小休みであろう。親も子もそれを待ちかねて、いそいで乳房をふくませたのである。出来秋の野風も赤子の肌には荒過ぎるので、かかしを風よけにして田の畔に座どるなど、いかにもありそうな田園風景であるが、一茶のあたじけなさは、一度つかまえた題材なり着想なりに執して、蒸し返し蒸し返しするので、結果としてはいずれもの鑑賞を鈍くさせられるのである」。

人はいざ直なかゝしもなかりけり

出　文政版発句集

▽　中七「直な案山子も」。

解　人はいざ知らず、真直に立っている案山子はないものだよ、の意。「直な」は、人の心に案山子の姿を掛ける。

穂芒や細き心のさわがしき

㊐　文政版発句集・発句鈔追加

解　高く突き出すようにのびた穂薄、わずかな風にも落着かないことだ、の意。

爰に正風院、此奥に百花あり

門にたつ菊や下戸なら通さじと

㊐　文政版発句集

▽　上五「門に立」。

注　「正風院」、信濃国水内郡長沼（現長野市穂保）の人。佐藤信胤。魚淵・二水観・草不庵・正風院・正風堂などと号した医家。北信における一茶社中の有力者。一茶代撰による『木槿集』『あとまつり』がある。『おらが春』第五話に、エピソード。

解　門前に並べられた菊の鉢、それが菊花を賞し、一献かたむけざる者は通り過ぎることまかりならぬ、というふうだ、の意。八番日記（文政2・9）・おらが春に、「九月十六日、正風院菊会」と前書して、「鍬さげて神農貞や菊の花」「菊園や歩きながらの小盃」。

鍬の柄に子(小)僧の名あり菊の花

㊐　八番日記（文政2・9）

▽　中七「小僧の名有」。

解　菊園の端に鍬が一本目に入る、その鍬の柄にこの菊園の手入れをしただろう若者の名を見付けたのである。

大菊や今度長崎から抔と

㊐　八番日記（文政4・9）・文政九・十年句帳写（文政10・7）・文政版発句集・希杖本句集

▽　八番日記以下、座五「よりなどゝ」。

解　これは今度長崎から取り寄せた珍種などと言って、大輪の菊を自慢しているのである。

酒臭き黄昏ころや菊の花

㊐　嘉永版発句集初出

解　観菊の宴はたけなわ、菊園には酒の匂いがただよっ

ている。

勝た菊大名小路通りけり

㊐　文政版発句集

▽　七番日記（文化15・9）・だん袋、上五「勝菊は」。座五「もどりけり」。梅塵本八番日記（文政3）、上五「勝菊は」。座五「通りけり」。

解　品評会で入賞の菊鉢をかかえた人物、胸を張って帰途をたどっている、の意。

菊園や歩行ながらの小酒盛

㊐　八番日記（文政2・9）・おらが春

▽　座五「小酒盛」は「小盃」の誤りであろう。八番日記・おらが春、中七以下「歩きながらの小盃」。

解　振舞いの盃を手に、菊を賞しながら談笑する菊見の客である。

▽　勝峯『評釈おらが春』に、「眺めて一盃、褒めて一盃、菊と盃を等分に見つゝ、愉しく酔ひ、快よく悦に入る客振りは歩くことを条件とする花園なればこそ、菊なればこそ許され、もてなされる風景である。其角の『その花にあるきながらや小盞』（いつを昔）を胴忘れしたとでも見なければ借りものになる。が、桜だと周囲が騒がしく、忙しい気分で、菊園の悠々と落着いて、盃を持つて歩々に愉しむ風情に如かない。さればと云つて其角の句を無視されぬ。一茶は知らなかつたか、忘れたか、何ンにしても立派に此の句の持主だといへないのを惜しむのである」。川島『おらが春新解』に、「床几などがすえてあって、手軽に一献ふるまわれる、その盃を手にしながら、あれこれと、あるじの説明のままに腰を浮かして園中を見てまわる。というような、楽しげな情景が目に浮ぶが、其角の『いつを昔』に、『その花にあるきながらや小盃　其角』とある。『五元集』には、『妓子万三郎を供して』と、前書付きになっている。これを一寸拝借したのである」。

まけ菊をひとり見直す夕かな

㊐　板本発句題叢・文政版発句集

▽　稿本発句題叢、「負菊を乞と見直す一人哉」。文政句帳（文政5・9）、「負菊をじつと見直す独かな」。希杖本句集、「負菊を吃と見直す一人かな」。

解　丹精して育てあげた菊であろう。品評会に出して入賞をのがした、その夕べ自宅にもどって、じっとそれを見つめているのである。

後の月

月の顔年は十三そこらかな

㊢　八番日記（文政4・9）・文政版発句集

▽　前書なし。座五「そこら哉」。

解　昇ったばかりの月、今日の月齢は十三夜くらいかな、の意。

名所紅葉

欠椀も同じ流れや立田川

㊢　文政句帳（文政5・8・12）・文政版発句集

▽　文政句帳（5・8）、前書なし。中七「同流や」。同（5・12）、前書「紅葉浮水」。

解　川面に紅葉を浮べて流れ行く立田川。その中にだれが捨てたのか欠け椀が一つ、の意。

(小牡)
棹鹿の水涕拭ふ紅葉かな

㊢　文化三〜八年句日記写（文化4）・連句稿裏書・文政版発句集・希杖本句集

▽　日記写、上五・中七「小男鹿の水鼻ぬぐふ」。連句稿裏書、上五・中七「小〔男〕鹿の水鼻拭ふ」。稿本発句題叢、「さをしかゞ水涕ぬぐふ紅葉哉」。希杖本句集、「小男鹿の水涕ぬぐふ紅葉哉」。

解　牡鹿がいかにも鼻水でも拭うように、地上に散った紅葉を鼻先でかき散している。小牡鹿・紅葉という観念的・常套的取り合わせに「水涕」を強引にはさみ込んだところに一茶の特色がある。

大寺の片戸さしけり夕紅葉

㊢　文政版発句集

▽　七番日記（文化8・9）、上五・中七「大寺や片〳〵戸ざす」。

注　「片戸」、一枚の開き戸。片開きの戸。

解　大寺の片戸に夕陽にはえる紅葉の影がさしているのである。

毒　茸

人をとる茸はたして美しき

㊀　稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽　発句題叢・希杖本句集、座五「うつくしき」。

解　人の命をとるという毒茸。それは言われるとおり見た目には美しい、の意。

大茸馬糞も時を得たりけり

㊀　稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

▽　発句題叢・希杖本句集、前書「馬屎茸」。発句鈔追加、上五「大きのこ」。

解　俗にマグソタケと呼ばれる馬糞に似た色形の食用にはならない茸である。「時を得たり」は茸の名に冠された馬糞の存在を言う。

茸狩のから手で戻る騒かな

㊀　八番日記（文政2・9）・おらが春・斗囿あて書簡（文政3・9・14）・文政版発句集

▽　八番日記、上五・中七「茸がりのから手でもどる」。書簡、中七「から手でもどる」。

解　たいした収穫もないのに、大騒ぎをしているというのであろう。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「手も空ら、籠も空ら、草臥れて擡（もた）がらない足取りも空らである。一日かゝつて、山をさがし廻つて、此の体たらくでは面目なさに萎れきつて戻るはずである。それが何んとあの騒ぎつたら、見られた図ではない」。川島『おらが春新解』に、「酒よ弁当よ、酒のさかなには取ったきのこをその場で焼いて食おう、弁当を入れて行った籠には、帰りには茸をいっぱいにして、などと楽しい期待をかけて出かけて行った茸狩が全く不作で、

人々が空手でもどってくる照れくささに、がやがやと騒ぎながら山を下ってくるさまである。これは黙々とせしめていく山人のそれではなくて、行楽的な茸狩気分である。木の間がくれに赤いものをひらつかせる女も交っている都人士の一行を思わせる」。

戸隠山

初梨の天から降た社だん(壇)かな

㊐　文政句帳（文政8・9）・文政版発句集

解　戸隠の社殿に梨が一つ。こんな所に梨が。天から降ってきたものかと推量する、の意か。

柿の木であいと答へる小僧かな

㊐　八番日記（文政3・9）・文政版発句集

▽　中七「あえ(い)［と］こたいる(へ)」。

解　柿の枝は折れやすく、のぼって遊ぶのは危険である。いたずらざかりの男の子、姿が見えずに心配した家人が、その名を呼ぶと、柿の木の上から「あい」と事もなげに返事をした。

小布施

拾はぬ栗の見事よ大きさよ

㊐　七番日記（文化10・9）・文政版発句集

▽　だれも拾わなかった栗、その色艶、大きさよ、の意。「小布施」は栗の特産地。

柿の実や幾日ころげて麓迄

㊐　嘉永版発句集初出

解　傾斜地に柿が一つころがり落ちている。この柿は幾日ころがったら麓に到ることが出来るのだろう、の意。

虱のひねりつぶさんことのいたはしく、又門に捨て断食さするも見るに忍ばざる折から、御仏の鬼の母にあてがひたまふものを、ふと思ひ出して。

我味の柘榴へ這す虱かな

㊀　八番日記（文政3・9）

▽　八番日記、前文「虱のにくさに捻りつぶさんもいたわ(は)しく、又草に捨て断食させんも見るに忍ざる折から、鬼の母に仏のあこ(て)がひ給ふこと思ひけるまゝに」。中七「柘榴に這す」。八番日記（文政3・1）、「我味〔に〕かはらぬ柘榴あてがふぞ」「人味の柘榴へ這す虱かな」「彼岸とて袖に這する虱かな」。文政九・十年句帳写、前書「しらみをひねり潰さんことの痛しや。又門に捨て断喰(食)させんもいと哀也。御仏の鬼の母に与へ給ふものをふと思ひつけて」。「人味の石榴にははす虱哉」。

注　「鬼の母」、鬼子母神。王叉域の夜叉神の娘。千人（万人・五百人とも）の子を産んだが、人の子を奪っては食するので、仏はこれを教化しようと、その末子愛奴を隠し、悲嘆にくれる鬼子母を戒めて子を返してから、人肉に似た味がするという吉祥果（柘榴）を与え正教に帰依させたという（鬼子母経）。それゆえ、鬼子母神像は、手に柘榴を持つ天女の姿をとる。

解　「虱のひねりつぶさんことのいたはしく、又門に捨て断食させるも見るに忍」びなく、人肉に似た味がすると言われている柘榴の実の上に這わせてやる、の意。

▼　勝峯『名句評釈』に、「虱が果して柘榴にたんのうしたか否か、それからあとの事はどうなつたか、一茶は何も書いてゐない。柘榴に人間の味がするといふ言伝へに興じて、かうしたまでゝ、一の座興句である。こんな事で一茶を擔ぎあげるならば、贔屓の引倒しとなり、一茶を偽善者にしてしまふであらう」。

老いの身は今から寒さも苦になりて
山畠や蕎麦の白さもぞつとする

㊀　文政句帳（文政7・11）・文政版発句集

▽　文政句帳、前書なし。中七「そばの白さも」。七

番日記（文化14・8）、上五・中七「しなのぢやそばの白さも」。

解　山畠一面を白く色どる蕎麦の花、その白さに豪雪の冬を連想して、「ぞっと」する、の意。

▼　川島『新釈』に、「山畠とあるので、山の峡々にちよつぼりとある畠地を想像して見る。白く群れた花は、梨の花なぞにもゾツとした感じがあるが、こゝでは地に敷かれた蕎麦の花であるのと、前書に依ると、おのづと雪が想像されてゾツとしたものと解せられる。然し、其処まで突込まずに、秋冷の気の満ちた山畠に雪白な蕎麦の花を見て、何かはしらずゾツと身に沁みた感じと解する方が、この句を活かす解し方であり、正しい見方でもある。この前書もあとから付けられたものに相違ない。尤も、蕎麦の収穫後には雪が来るといふ理智から行つても、雪を連想させる蕎麦の花の感じから行つても、寒さに対する予感が、発想の主要動機となつて居ることは勿論である」。金子『一茶句集』に、「蕎麦の花の白さに『ぞつとする』ということには、『霧下そば』の、霧のなかに一面に咲く白い花への鋭敏な生理感応がある。この句は六十二歳の作だが、五十五歳のときにつくった、『しなのぢやそばの白さもぞつとする』が最初だった。そしてこのときは「疥癬」に長いこと悩まされてやっと直ったばかりだったのである。『ぞつとする』には〈病体の生理感応〉があったと私は読む。その感応がそのまま残っていた。しかし『しなのぢや』は忘れてしまって、『山畠や』を置いた。『しなのぢや』にはまだ望郷の名残があった（この頃まで江戸にでて、上総、下総を歩くことも多かった）が、六十二歳の一茶には眼の前の山河田畑の北信濃しかなかったから、感応を即物的に書くことしか考えられなかった。そして、即物で書くことによって、望郷のなかに蔵いこんで表には現わさずにいた郷土の嫌な面までも曝けだすことを躊躇うことがなくなっていったのである。そのせいか、『山畠や』ときて、病体の生理感応にまで深まり、そこに〈心理の隠絵が見えてくる。あの〈嫌な雪の冬〉への『ぞつとする』おもいまでが見えてくるの

である」。

秋の夜や障子の穴の笛をふく

㊐　我春集・文政版発句集

▽　中七「障子の穴が」の誤りであろう。我春集、中七以下「せうじ(しや)の穴が笛を吹」。七番日記（文化8・9）、中七以下「窓の小穴が笛を吹」。

解　秋風の立つころ、障子の破れから夜風が「ひゆっ」と音を立てて吹き込んでくる、の意。

庵の夜や寝あまる罪は何貫目

㊐　七番日記（文化10・8）・句稿消息・文政版発句集

▽　七番日記、座五「何〆目」。

解　収穫の秋、早朝から日没までいそがしく立働く人々の間にあって、自分だけは句作三昧、「寝あまる」ほどの睡眠時間、働かずして食らうこの罪は、量りしれない、の意。希杖本句集に、「耕ずして喰、織ずして着る体たらく、今迄罰のあたらぬもふしぎなり」と前書して、「もたいなや昼寝して聞田うへ唄(ゑ)」（この句、初出は寛政紀行書込）。

▼　勝峯『名句評釈』に、「田に耕し、山に木を取り、忙しく働く人々の間にあつて、自分一人は句三昧に耽り、夜も人より多くの時間を寝る。もつたいない事だ」「抽象的の『罪』を『何貫目』と評価する所、例の一茶の量的形容手法である」。

木枯や諸勧化いれぬ小制札

㊐　文政版発句集

▽　上五「末枯や」の誤りであろう。文政版発句集、上五「末枯や」。七番日記（文化15・9）、「当村旱魃」と前書して、「末枯や諸勧化出さぬ小制札」。

注　「勧化」、寺院の建立・修復などのためにつのる金品。勧進。転じて、物乞いの意にも。「制札」（せいさつ）、禁止事項などを記して路傍や辻に立てた立札。

解　旱魃のため、日常生活にさえ苦しむこの村に立てられた「諸勧化」お断りの立札である。

▼　勝峯『名句評釈』に、「句を鑑賞するには多く前書を必要としない。この句の如きも、前書なしで十二分通る句である。しかし、その成因がかうしてわかつて来れば自らそこに別の条件が加はる。成因のわかるだけは研討すべきである。客観的にその作品だけを鑑賞するも固より結構だが、それに止まつて作の時を、作の因を、作者の環境、心境を全く考慮の外に置くといふには与することが出来ない」。栗山『一茶』に、「村は旱魃のため窮乏はなはだしく、一切の寄付や物貰いは立入ってはならぬという小さな立札が村の入口にあるとの句意。『出さぬ』の句形では村人に対する警告となろう。柏原は北信濃の高地にある寒村で、火山灰地の田畠は痩せ、平年でも栗・稗・蕎麦などしか育たない。まして旱魃となれば、農民の窮乏はその極に達しよう」。

九月尽

今日まではまめで鳴たよきり〴〵す

㊐　七番日記（文化9・5）・句稿消息・志多良・文政版発句集

▽　七番日記、前書なし。句稿消息・志多良、上五「けふ迄は」。文政版発句集、上五「けふまでは」。

解　九月尽、明日からは冬に入る。秋のうち、めいっぱいに鳴いたコオロギたちだよ、の意。

行秋を尾花がさらば〳〵かな

㊐　句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集

▽　句稿消息・発句題叢、座五「さらば哉」。七番日記（文化10・9）・発句鈔追加、中七以下「尾花もさらば〳〵哉」。

解　行秋をおしむ心は草木も同じ。すすきも「さらば〳〵」と、その穂を振っている、の意。